

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山辺弦

山辺弦氏の論文『^{パラドクサル・フーゴ}定位されざる逆説的遁走—ビルヒリオ・ピニェーラとレイナルド・アレナスの長編小説における「弱い」身体^の政治性—』は、副題に示された二人の二十世紀キューバ人作家の長編小説を比較分析し、その主人公像に共通の運動と潜在的な政治的批判性を見出した注目すべき論考である。本論考によれば、両作家の主人公たちは教条的抑圧に直面するが、それに服従する道も抵抗する道も選ばず、絶えず周縁へと逃走することで教条主義のもつ二項対立自体を無効化・批判する。そうした批判は自分自身のあり方にも及び、みずからが教条と化す危険を未然に回避すると同時に、彼らの「遁走」を「定位されざる」ものにしていく。この「自己言及的批判」は、バティスタ独裁政権を打倒して誕生したカストロ革命政権が、やがて硬直化し、新たな独裁政に転化してしまった事情を想起するとき、深長な意味を帯びる。

カストロ政権の抑圧的な文化政策により、キューバの多くの文学者たちが反革命的との烙印を押され、弾圧されて沈黙や亡命を強いられた。彼らの作品は今日なお、政治的なバイアスのかかった恣意的な評価にさらされている。反体制的な同性愛作家であったピニェーラ（1912-1979）とアレナス（1943-1990）もその例外ではない。山辺氏の論文は、ここに垣間見える「失われた文学史」を再構築する試みの一環として位置づけられる。

本論文は序論、本論全五章、ならびに結論から構成される。序論では上記のような問題意識が表明されたのち、二人の作家をめぐる先行研究の傾向と問題点が整理され、ピニェーラとアレナスを比較した論考自体が僅少であること、前者は不条理文学ないし実存主義文学の書き手として、後者は同性愛文学者として論じられる傾向が強いことなどが指摘される。次いで本論文の目的、対象、方法に加え、全体の見取り図が示される。

第一章では、次章以降で展開される作品分析の前提として、キューバ政府の文化政策との関連においてピニェーラとアレナスの生涯と作品が概観される。映画『P. M.』の上映禁止処分を発端とする一連の出来事（1961年）や、詩人エベルト・パディージャが公衆の面前で自己批判を強要されたいわゆる「パディージャ事件」（1971年）などを通じてキューバ政府が文化人への弾圧を強化してゆく過程が描出され、抑圧的な雰囲気の中で二人の作家も次第に周縁化されてゆく様子が示される。また、国内に留まって沈黙を強いられたピニェーラが今日、国民的作家として正典化の道をたどる一方、アメリカ合衆国に亡命してその地から激烈なカストロ批判を続けたアレナスが、キューバではいまだに黙殺され、文学史から組織的に排除されている事態が語られる。

第二章では、ピニェーラが生涯に発表した三長編のうちの第一作『レネーの肉』と、ア

レナスの長編五部作（ペンタゴニア）の第一作『夜明け前のセレスティーノ』および第二作『純白のスキャンクたちの宮殿』が比較分析される。まず、どの作品の主人公も、社会や家族が彼らの身体の統制を通じて強要する教条的規範に服従できず、周縁に向けての逃走をくり返すことが示される。続いて、主人公たちがこうした行動を取るのには、「怖れ」の感情ゆえに彼らの身体が「他者性」と「両義性」を保持しているからであることが指摘される。ここで、「他者性」とは「自分自身でありながら、客観化・対象化され得るものとしての身体の性質」と定義され、小説中にしばしば登場する「分身」の姿と結びつけられる。この「他者性」を通じて、主人公たちは抑圧に苦しむ自己の姿を他者に投影し、他者のこうむる抑圧や苦悩を発見し、共感を抱く契機を得るといふ。さらに、同じ主人公たちは、「互いに相矛盾する異質な要素を含み持ち、しばしば二項対立的分類に対して決定不可能性を示す性質」、すなわち「両義性」を身体に具えているとされる。それゆえ苦痛と快楽、暴力と愛情、規範への適応と逸脱、自己と他者といった二項対立のどちらの一方にも一体化することがないとの結論が導かれる。

第三章では、ピニェーラの長編第二作『ちっぽけな演習』とアレナスの五部作の第三作に当たる『ふたたび海』が比較の対象となる。まず、両作品の主人公もまた、怖れや絶えざる逃走によって特徴づけられること、教条的な体制に順応しているかに見える他の人物の仮面の背後に、「他者性」を通じて弱さや怖れを見出し、それに同情を覚えていることが確認される。次いで彼らが、周縁化された声なき人々の物語の「読み手」たるに留まらず、その「書き手」の役をも担うようになることが指摘される。さらに、「書く」という行為が、「いま、ここ」ではない別の時空間に証言を伝達し得る点で、逃走の一形式であること、権力の抑圧に対する抵抗を含意することが示される。身体の「両義性」が教条主義に対して含み持つ政治的批判性は、次の三点にまとめて論じられる。すなわち、個々人の生の多様さが二者択一的な一義性と本質的に相容れないという「原理的批判性」、主人公の人物像や物語が複数の矛盾した真実を許容することや、逃げ回って生き延びる反英雄が逆説的に英雄に転ずる事態などに見られる「認識論的批判性」、物語が自身の信憑性に疑問を呈し、自身の権威を失墜させることでみずから教条と化す危険をあらかじめ回避している「自己言及的批判性」である。本章の結論部では、ピニェーラとアレナスの小説の基層に存する原理が改めて問い直され、「^{パラドクサル・フーガ}定位されざる逆説的遁走」という独自の概念が導き出される。

第四章では、ピニェーラの最後の長編小説『圧力とダイヤモンド』とアレナスの長編五部作の第五作『襲撃』に焦点が当てられる。極端に全体主義的な社会を描いた両作に、ディストピア小説の諸要素が共通して見られることが最初に指摘される。具体的には、不可視の権力の遍在、それに起因する人間関係の断絶、身体や言語の機能の著しい制限、主体性の剥奪といった要素であり、前者の小説には「退行するディストピア」、後者には「動物化したディストピア」という性格付けがなされる。次に、『圧力とダイヤモンド』の主人公像が分析され、その特質として、怖れゆえに多数者の支配的イデオロギーに服従できず周縁化されること、身体性と言語能力が制限された社会にあってなお、そうした能力を保持

し続けること、逆説的英雄の側面をもつことなどが抽出される。これらの特質には、作家の前作までの主人公たちとの連続性が認められるが、一方、本作の主人公が逃避の姿勢を示さず、抑圧的な社会の打破を企てる「抵抗する主体」として立ち現れる点では、従来の主人公像を「逆転」させているということが確認される。しかし筆者によれば、社会全体が主体性を放棄し、退行へと向かう本作では、そうした逃避的な行為の方が教条と化しているのであり、主人公の示す対決姿勢は、そのような教条からの「定位されざる遁走」と規定できるという。続いて、『襲撃』の主人公像に検討が加えられ、独裁国家の権力の中樞を占め、「服従する主体」として体制と一体化しているように映るこの人物が、実際には主観を保持し、それにより体制を批判し得る唯一の主体であることが示される。さらにジュリア・クリステヴァのアブジェクション概念が援用され、彼の抱く母殺しへの熱望が、実は主客合一と自己再生産（すなわち一義的な教条との融合）への嫌悪に起源をもつことが明らかにされる。物語の終盤、男根を貫通させて独裁者＝母親を殺害する主人公は、「服従する主体」から「服従」とも「抵抗」とも定めがたい両価的な主体へと変貌する。前作までの主人公像の「逆転」・批判としてあった本作の主人公が、作品の内部において再度の自己転覆を図り、「自己言及的批判性」を発揮していることがここに主張される。

第五章では、アレナスが生涯の最後に行った小説で、長編五部作の第四作に当たる『夏の色』が分析の対象となり、メタフィクション性やバフチンの多声性、カーニヴァル性に富んだ本小説と、前章までに扱われた小説群との連続性が証明される。まず、本作の主要テーマである「性」と「笑い」のうち、「性」の主題が取り上げられ、多種多様な形の性愛が展開される本作に関し、先行研究が男性同性愛のみに注目してきた点が問題視される。続いて、「性」が権威を卑俗なものに貶め、支配層と被支配層とを相互に結びつけ、両者の境界を無化することで政治的批判性を生み出すこと、「性」による異質な者同士の結合が「他者性」を惹起することが指摘される。さらに、本作に描かれた「性」が「両義的」性質を有し、権力や抑圧に抵抗するだけでなく、それらを助長する側面もあること、そのような否定面の描写に「自己言及的批判性」が見出されることが示される。次に『夏の色』のもうひとつの主要テーマである「笑い」の考察に移り、革命のスローガンなど公式言説や文学史上の正典がパロディー化されることで嘲笑され、その威光が剥奪されていること、そうした言説への批判が多くの場合、言語に本来具わる「両義性」に依拠していることが指摘される。また、「信頼できない語り手」の採用や「語り直し」の手法など通じて、言説批判はみずからの語りにも及んでいることが明らかにされる。

なお、第二章から第五章までにおいては、当該の章で論じられる作品の基本情報と梗概が章の冒頭に示され、読者が議論の道筋をたどりやすいよう配慮されている。

結論では、各章の議論が総括・整理されたのち、二人の作家の実人生がまさに政治的抑圧からの「定位されざる逆説的遁走」であったことが述べられる。さらに、両作家のおのおのの文学原理として先行研究によって提起された概念、すなわち「冷たさの詩学」、「破壊の理論／詩学」、「亡命の詩学」、「脱神話化の美学」といった概念が批判的に紹介され、

それらと筆者の創出した概念との相違点が明確化される。

以上のような概要をもつ本論文に対して、審査委員会では一致して高い評価が寄せられた。本論文の学術的成果としては、次の諸点が挙げられる。

第一に、これまで比較して論じられることの稀であったピニェーラとアレナスの長編小説において、主人公たちが共通の運動を示すことを指摘し、「定位されざる逆説的遁走」という独自の概念を構築して、その複雑な運動を十全に説き明かした点である。さらに、明示的な政治批判の言説とは別に、より苛烈な政治的批判性がテキストの深層に潜在するのを発見した点で、本論考は二人の作家の研究史に新たな局面を切り拓くものと評価できる。

第二に、テキストの丹念で精緻な読解の成果として、先行研究の解釈に随所で見直しを迫っている点である。たとえば、ピニェーラの小説『圧力とダイヤモンド』には、デルフィ (Delphi) という名のダイヤモンドが登場し、やがて便所に捨てられる。従来の研究はここに、フィデル (Fidel) ・カストロへの諷刺を見てきたが、筆者はこのダイヤに「人生の実感」といった肯定的な価値をも看取り、両義性を与えている。

第三に、プリンストン大学図書館の所蔵する未刊行の書簡や草稿が論文中に適宜活用され、貴重な情報を提供している点である。

第四に、ピニェーラの小説の風変りな魅力やアレナスの小説の過激さ、前衛性を分かりやすい形で描き出した点である。

一方、本論文に残された問題点としては、以下の諸点が指摘される。

第一に、ピニェーラとアレナスがラテンアメリカ文学史上、どのような位置を占めるのか、あるいは同時代の作家たちとはどのような関係にあるのか、といった点の記述が十分ではなかったこと。

第二に、両作家の共通項を探し、指摘することに筆者の注意が集中した結果、序論で目標に掲げられていたにもかかわらず、両者の相違点を明らかにする記述が乏しくなったこと。

第三に、「怖れ」という感情を人間の「心理」にではなく、「身体」に由来させた理由の説明が不十分であったこと。

第四に、現代思想の用語がときに不用意に使用されていたこと。

しかしながら、こうした問題点は今後克服されるべき課題であり、本論文の独創性や学術的価値をいささかも損なうものではない。したがって審査委員会は、全員一致で、本論文が博士 (学術) の学位を授与するにふさわしいものと認定する。